

隠された術

じりじりと力を強めていく太陽は、鬱蒼とした森の若葉を、目もくらむような緑の宝玉に変える。木漏れ日は透き通り、日陰には、古くなって崩れ落ちた大木がうずくまり、湿った腐葉土が、異なる旅装に身を包む一団の足を滑らせて楽しむ。

そんな気ままな森の世界を、一団は淡々と前進していた。

先頭を歩くのは、若葉色の外衣を羽織った、自然の人三人だった。彼らは、音もなく、足跡もつけず、木々の間を抜けていく。その後ろには、白い外衣を翻す師の人たちがおり、こちらは二人いた。背を丸めて、根っこや岩が突き出る地面を、歩きづらそうに進んでいく。

彼らのあとを、一つ一つの動きに無駄のない、男二人がついていた。こちらは狩りの人であった。皮の胴着に直刀や弓を下げ、ぴたっぴたっつと、一歩ずつ確実に進んでいく。

しんがりを務めるのは、灰色の山犬を連れた、獣の人の女だった。山犬の背丈は獣の人の腰までであり、分厚い足で主人を追っていた。ときおり大気の匂いを嗅いでは、また歩を進める。獣の人は、その山犬と同じように、淀みない瞳で周囲を観察した。

彼らは、長たちから信頼と経験をかわれて結成されたアバルバン谷捜査班だった。二日前に自然の村を出発し、この日はついに、青の真中山エイレスマイルアムウツアの麓にあるアバルバン谷へ直進していた。昔は、アバルバン谷行きアバルバンの馬便があったのだと、自然の人たちは説明する。だが、利用客が少なくなり、加えて地滑りの危険が

あったため、アバルバン谷の馬便停は数年前に姿を消したのだ、と。

捜査班の一人、ゲドルという名の狩りの人は、その話を聞いて、妙に都合がいいな、と考えた。馬便がいまでも通っていれば、間違いなくアバルバン谷の異変は早くに知れ渡っていただろうに。

エイレスイルアエウツテ
青の真中山の足元へと進みながら、ゲドルの気持ちは奇妙に高ぶっていった。耳に届く葉のざわめきも、ちらつく木漏れ日も、どこか不穏を感じさせる。

先頭の自然の人たちが、坂を下りはじめた。今まで見えていた若葉色の外衣が、一人、一人と、下へ消えていく。

「ぬかるんでいますから、気を付けてください」

自然の人サリマアの声が聞こえた。彼は、三人いる自然の人の中で一番の年上であり、この一団の案内役だった。サリマアは齢七十を超えていたが、ユーロナン人差し指山地の調査員として普段から山を駆けまわっているため、足腰はとても頑健で、息切れをすることもなく、しなやかに獣道を歩いていた。

サリマアに続いて、いくつかの坂を登り降りしているうちに、木々の向こうに谷の北側が見えてきた。その地表は、萌える新緑を差し置いて、流血がおこったように赤褐色をしており、残酷な無毛の地となっていた。

バザンナルシムサグマ
(ノセンタルア様と〈火炎白竜〉の戦いの跡だ)

ゲドルの緊張は、肌を刺すほどになっていた。ノセンタルア魔導師は、ノウア魔導師の先代の長であり、アバルバン谷の北側を炎の海にしたバザンナルシムサグマ〈火炎白竜〉を仕留めたことで、名を残していた。

バザンナルシムサグマ
〈火炎白竜〉は、魔導師との戦いで鉄の血を流し、以降、谷の北側は、鉄の酸化で赤くなり、緑が戻らなくなったのだという。唯一、山火事と鉄の血に

滅ぼされなかったのが、鎮火後に見つかった両手大ほどの土塊で、焼けずに湿ったままの苔を残して輝くそれは、「山の心臓」と名づけられ、ノセントルア魔導師とへバザンナルシムザグマ「火炎白竜」の戦いの記念建造物「炎はじきの宮」の地下深くにおさめられた。「炎はじきの宮」は、へバザンナルシムザグマ「火炎白竜」を牽制する役割をもち、また、火災からの守護を目的とした参拝も行われたのだった。

しかし、人差し指山地ユーロンナンの山腹に建てられた「炎はじきの宮」は、1521年、山に眠っていた魔法動物マグレイスム（地底走り）が暴れて起こった地震で、崩れてしまった。「山の心臓」も地中に埋もれてしまい、いまだ見つからないままだ。

地震は約二十年前の話で、アバルバン谷一帯は災害の爪痕が残ったが、植物たちは変わらず粘り強い生命力を見せ、いまでは痕跡を覆い隠すまでになった。ゲドルは、幹にしがみつくと太い蔦や、うっそうと茂る、天を突かんばかりの木々を仰ぎ見て、畏怖とともに、張り詰めた気持ちになった。ふと、狩場であるデイゴンネーを思い出す。巨木の迷宮、どす黒い闇、そこに潜む山のような獣たちの息遣い……。

「デイゴンネーと似ているな」

後ろを歩く顔の四角い男が言い、ゲドルは、はっとした。男はモアルブとい、ゲドルと同じく、狩の人だった。

「ああ。エイネーの山にはいくつか入ったことがあるが、ここは特にそう思う」ゲドルは言ったが、モアルブは返さなかった。モアルブは、大腿で根っこを跨ぎ、ジグザグに歩いてゆく。彼の背中には、理由のわからない緊迫が現れていた。

日も傾き、山陰を歩く一団の視界は、早々に明瞭さが失われはじめた。前方でサリマアの声がした。

「予定地点より手前ですが、野宿の場所を探そうと思います」

ゲドルは、モアルブと頷きあい、サリマアに言った。

「そうしてくれ。日暮れまで少しあるが、急いで行くのは危険だろう」

しんがりを務める獣の人も、「少しいけば川がある。水の調達もしましう」と賛成した。

「いいや、予定通り、バミーク 鬼はなほちの花洞で野宿すべきだ！」

そう言ったのは、師の人シャンタリクだった。長身の彼は、芯のある硬い声で、突くように言った。「ここはぬかるんでいて、野宿に向いていないっ」

「鬼バミークの花洞はなほちは、あと二時間ほど歩かなければ着きませんが……」自然の人、トウトウアリという面長の若い男が、サリマアに相談するがごとく顔を向けた。

サリマアが答える前に、師の人シャンタリクは叫んだ。

「女王陛下が下された命では、もう我々はアバルバンを引き返している頃だ！

……市いちで時間を食ってしまったのが悪い。あなたたちがあんな風に渋らなければ……」

自然の人々は顔を強張らせた。一番背の高い自然の人が進み出る。メテリという名の女だ。

「言わせてもらいますが、我々は渋ってなどいません。山を歩くのは危険を伴う。それに、ここから先には、〈見えな死〉と、〈天守りグロナーシユ〉を撃ち落とした元凶があるとされているのですよ。用意に用意を重ねて……」

「〈見えない死〉を調べに来たのに〈見えな死〉に怯えてどうする？ あなたたちのおかげで荷物は増え、時間は押したのですぞ！」

いがみ合う二つの仕事人の間に、狩りの人のモアルブが割り込んだ。彼は、

四角い顔をシャンタリクに向けた。

「何を言っているのだ。自然の人らは、この土地の者だ。彼らの指示に従うのは当然のことだろう」

シャンタリクは眉を寄せた。狩のモアルブ、ゲドルと目を移す。薄闇の中で鋭い瞳がぎらぎら光る。

「あなた方も、これがどれほど早急な任務なのか、分かっておられないのか？ デイゴンネーで狩りをする普段の任務とは違うのだぞ。これには、国の命運がかかっているのだ！」

二人の狩りの人は、顔を強張らせた。だが、四角顔のモアルブは言った。

「ええ。だからこそ、軽率な失敗はしないようにと、みなが思っているのです。ここでいさかいを起こしても、何の意味もありません。急がなければいけないのも分かりますが、確実な道をとらなくては」

シャンタリクとモアルブは、しばらくの間睨み合ったが、やがてシャンタリクの方から、呆れた様子で目をそらした。

「鬼の花洞パミーク はなほらへは、行くべきだと思いますね！」シャンタリクは自然の人のサリマアに怒鳴った。「少なくとも、これ以上時間を押すのはまずいでしょう。予定外の行動をするのは、もう避けなくては！」

自然の人たちは顔を見合わせ、渋々頷いた。

「では、少し速度をあげますが、いいですね？ 急げば日暮れまでに着くでしょう」

一行は再び歩き出した。

ゲドルの前で、師の人シャンタリクともう一人の師の人は、やれやれと肩をすくめた。

「長の会は精鋭を選んだのではなかったのか？ 決定に三日もかけたというが

……。まさか、こんな鈍い方々だったとはな、セーテト」

シャンタリクは、セーテトと呼んだ師の人と話した。セーテトは、焦げ茶の顎髭の下でひそかに笑った。ゲドルは、その様子を後ろからじっと見つめた。

二時間と少し後に、アバルバン捜査班はバミーク鬼はなほらの花洞に到着した。鬼バミークの花洞は、谷の岩壁にできた大きな亀裂の名で、登山者の目印として昔から知られていた。

班員たちは、完全に日が暮れる前に、素早く野宿の準備を進めた。見張り役は、獣の人のレイゼという女が担当した。彼女は、亀裂の近くに茂る細い木の枝先を縛って霧雨を防ぐ屋根にし、その下で山犬カシトと共に座り込んだ。

亀裂の中では、自然の人三人と、二人の狩りの人が、他愛ない話に花を咲かせた。師の人たちは、むっとり無言のまま、彼らと距離を置いて座った。

「疲れ果てているのだ。無理をしおって」サリマアは小声で仲間と言った。やがて夜が来て、簡単な旅飯も済むと、班員たちは横になって、眠りについた。

月が雲の間に見え隠れし、無彩色の濃淡を描く。

ゲドルは、ふと、閉じていた瞼を開けた。起き上がって、耳を澄ます。

何も聞こえない。

生き物の音や、風の音……。森の者たちが、闇の中で黙りこくっていた。

ゲドルは、はっとした。

そうか、胸がざわついていたわけは、これだったのだ。ここは緑豊かな自然の村。虫の声一つしていいはずだが、ここに来るまで、生き物を一匹も見かけなかった。彼は警戒態勢を取った。

「どうした？」

横になっていたモアルブが、わずかにこちらへ体をねじる。しかし、ゲドルは、四つん這いになってサリマアへ近づいた。

老人サリマアは、猫のように丸くなって、隅で寝ていた。

「……サリマア、サリマア。ここは何か、変ではありませんか」

ゲドルが肩を揺らすと、サリマアの目はすでに開いていた。

「ああ。呪いが、すべてを脅かしているんだ。私ら以外、歩くものは一匹もおらんだろう。みんな逃げ出し、巢にもぐりこんでいる」

ゲドルはだが、老人の言葉に何か返すことができなかった。外で物音がしたような気がしたのだ。彼は、さっと入り口を振り返り、腰の短剣に触れながら、裂け目を出た。

瞬間、吐き気を覚えた。思わず、鼻と口元を塞ぐ。膝を折りそうになりながら、どうにか目を凝らすと、二、三步先に、木の影にうずくまるとす黒い塊があった。アベド一人分はある。

ゲドルは、胃の振動を感じた。一步、一步、近づいてゆく。あれは……。

声を上げる前に、彼は地面に倒れた。奥底から悪寒が湧き上がる。震えが体を支配し、視界は暗くなる。

薄れゆく意識の中で、彼は確信した、あれは、狩りの人レイゼだ。しかし、彼女と生涯の契りを結んだ相棒、一心同体であるはずの山犬カシトの姿は、どこにもなかった。

ゲドルは最後に、視界を横切って亀裂へ入っていく、目も潰れたかのような闇色の波を見た。

彼は、仲間に警告しようとしたが、体中、何かが重く詰まっているようで、声を出すことすらできなかった。

深淵に引きずり込まれるように、ゲドルの意識は、遠く遠くへ消えていった。

◆

魔導師ノウアは、胡坐をかきながら、目の前の〈天守り〉グロナーシユを注視した。収縮する皮膚にならぶ粒上の鱗、つるりと輝く目玉には、幾千万の青がちらついている。とぐろを巻いて魔導師を見下ろす〈天守り〉グロナーシユは、青空をかき集めて建てた家のようなだった。縦長の瞳孔は、どっしり構えている客を、門前払いをしよるか、それとも丸呑みしてやろうか、考えあぐねているようにも見える。

ノウアは、マノの療養室にいた。老魔導師は、以前のアリアと同じように〈呼び〉を行い、〈天守り〉グロナーシユを〈現〉へと引き出して、槍の傷を治療しようとしていた。

しかし、現れた〈天守り〉グロナーシユは、魔法陣の檻の中で暴れた。〈天守り〉グロナーシユは六本足でべたべた這い、首の溝を広げて、ルルルルを警告を発した。しかし、ノウアは動じなかった。頑丈な魔法陣を用意してよかった、老魔導師は思った。アリアのときは、魔法陣が壊されたと聞いたからだ。

〈天守り〉グロナーシユは、そんな老魔導師にいらだちを見せた。狭い檻の中で、肉厚な体を無理やり動かす。そして、がま口を開けるや、魔導師に襲い掛かった。瞬間、言葉が響いた。

《カーウル（静止）》

その奇妙な音は、〈天守り〉グロナーシユの尾、六本足、がま口と、順に硬直させた。空を駆け抜ける風の怒鳴り声が響き、ノウアの灰色髪を乱す。濃厚な大気の香りに老魔導師はむせかえったが、身動きのできなくなった〈天守り〉グロナーシユの肩へ、泳ぐようにして向かった。

肩の傷口は、ノウアの上半身程の大きさだった。止血しているが、裂けて崩れ、鱗が盛り上がり、泡立っている。

ノウアは、治療をはじめた。連なる実言葉アウシエヌムンが、魔導師の口からとうとうと流れる。〈天守りグロナーシユ〉はもがいたが、静止魔法とせめぎあい、魔法陣の中は危険な振動で満ちた。ノウアは、玉の汗を額に浮かべた。

魔導師の手から、輝く蜘蛛糸のようなものが伸びた。肩の肉の裂け目へと忍び込んでゆく。〈天守りグロナーシユ〉は唸り声を漏らし、空気は一度、大きく揺れた。

ノウアは、痛みの除去と肉の再生の意味を実言葉アウシエヌムンにのせて、根気よく〈天守りグロナーシユ〉を治した。

傷口が治癒の糸で塞がれると、〈天守りグロナーシユ〉はマノの〈黄身シラ〉へと帰っていった。見送ったノウアは、〈現〉にいる肉体で目を開けた。寝台の白い敷布が見える。椅子の上で胡坐をかく魔導師は、じっとして、〈現〉の風景に慣れようとした。

「あれが、〈天守りグロナーシユ〉ですか、魔導師様」

ノウアは、顔を上げた。寝台に横たわるマノが目覚めていた。顔をこちらに向け、金髪に顔が半分埋まっている。

「見えたのかいっ？」

魔導師は狼狽した。〈呼び〉の途中で覚醒し〈内世界〉を覗くのは、麻酔の切れた手術と同様に、痛みを伴う。悪ければ死に至ることだ。

しかし、マノにはそれほど疲労の色はなく、顔色もいくらかよかった。マノ

は言った。

「見たんじゃなくて、頭の中に浮かんだんです。青くて、おっきいやモリが……」

「おお、影の人よ……、よかった。頭に浮かんだということは、〈天守り〉グロナーシュと距離が離れつつあるということだよ。別離認知というものだ。宿主と魔法動物が完全に一体化してる時は、自分の姿が頭の中で描けないのと同じように、憑りについている魔法動物の姿もわからない。だが、頭に浮かんだということは、あんたは少しづつ解放されてるという証拠だ。よかったね」

マノは、だが、困った顔をした。右肩を少し動かし、顔をしかめる。

「怪我、してるの？」

「〈天守り〉グロナーシュかい？ そうだね。肩をね」

「だから、マノも、痛いのですか？」

ノウアは、肩をさするマノを見ながら、頷いた。

「あんたと〈天守り〉グロナーシュは、まだ少し混ざっているんだよ。体の感覚や記憶がね…

…どうだろう、今は、自分が以前どこに住んでいたか、覚えているか？」

「守りの村の、育ての丘でしょ？」

「ああ、そうだ」

「あのね、魔導師様。マノ、お外に行きたいの。お菓子を買いに」

「三日間、前に住んでいた場所を覚えていられたら、行ってもいいよ」

「でも、でも、すぐに行かないと。あのね、月の最初の日に、いるの……」

「何がいるんだね？」

「ガンちゃん」

「それは誰だい？」

「ちよりのひと」

その時、ノウアの視界の端に、何かが映った。

部屋の隅に、アベドの形をした白い影が立っている。すらりとした姿に、銀色の瞳が二つ、月のように仄かに光らせて。

影はノウアを目が合うと、寝台を通り過ぎ、部屋の扉を抜けて、出ていった。

「どうしたんですか？」ノウアの表情に気づいたマノは、部屋を見渡した。「だれかいるの？」

ノウアは、慌ててマノに視線を戻した。

「いいや。……その商の人のガンちゃんは、元気になったあんたを見たがっているよ。元気になるために、待つのは惜しくないはずさ」

「でも、やっぱり会いたい」

ノウアは、マノの陽だまりのような金髪をなでた。

「じゃあ、こうしよう。夢の中でガンちゃんに会わせてあげよう。ガンちゃん、夢の中であんたに気づく。それからあんたは、ガンちゃんになんでもねだるといいさ」

手の中のマノは、顔を輝かせた。

「魔法だね！」

「そうだよ」

ノウアは言うなり、少女の頭に何事かささやいた。意味をもたない音の羅列だったが、マノは布団を握りしめてクスクス笑った。

「ありがとう、魔導師様。ガンちゃんに会うね！」

ノウアは少女の頭を軽くたたき、部屋を出た。白い影が廊下の向こうに待っているのを、目の端に捕えながら。

エサルノアが呼んでいる。意思を飛ばして〈内世界〉を見るものだけに影と
なって現れる術、〈影招き〉は、有魔力者同士で緊急の面会を求める場合にのみ
使われた。

ノウアは鼻息荒く療養所を出た。以前、〈影招き〉によって呼び出されたのは
先代女王カサレアが亡くなったときだ。

捜査班が、なにか見つけたのだろうか。もしくは……。

老魔導師は、指輪に息を吹きかけた。指輪はみるみる解けて風になり、呼吸
で上下する柔らかな綿羽、こげ茶の鳳翼、黒い真珠のような瞳を生んだ。巨大
なフクロウ、ストロキントは、主人を見下ろすと、「ボホウ」と一つ鳴いた。

魔導師は、鞍巾着を装着させると、使い魔に飛び乗り、エイリアル城へ向
かった。

城の北西には、魔導師用の発着場がある。エイリアル城は氷筍形をしてい
るが、発着場のてっぺんは、切り取られたように平らになっていた。

ノウアは、ストロキントをその発着場へ着陸させると、城内への扉に近づい
た。西日が自分の影を扉に投げる。鳥人形になったストロキントが腕にとまり、
鈍い青紫の影法師は、真つ二つになった扉で割れ、薄暗い城の中に溶けた。

出迎えはなかった。廊下の分厚い絨毯が、足音を吸い込んでゆく。

「喪中ともいいたげじゃないか」

ノウアは、後頭部の皮が縮んでゆくのを感じた。城に常在している衛兵や付
き人たちの気配がしない。ストロキントは、ぴったりと主人の肩にくっついた。

女王の部屋の前にも、衛兵はいなかった。扉の取手に手を伸ばすと、分厚い
膜に弾かれたような感覚があった。魔力だ。女王自らが鍵をかけているのだ。

ノウアは拳をつくり、扉を叩いた。

「エサルノア、あたしだ。ノウアです」

すると、中から女王の声が聞こえた。「今、開けます」

しばらくすると、魔力の緊張がなくなり、扉が内側へ開いた。

「入ってください」

現れた女王の顔は、蒼白で陰しかった。

「なにが起きた？」

エサルノアは、とにかく中へ入るよう促した。

正面に書斎机があり、右手には、布張りの長椅子が二つ、向かい合わせに置かれている。その奥にまた一つ部屋があり、わずかに扉が開いていた。

女王はそちらへ老魔導師を案内した。ノウアは、なぜかぞっとし、ストロキントを指輪に変化させた。よくないものを見ることになりそうな気がした。指輪にはまる蜂蜜色の宝玉が、落涙のように一つ輝いた。

大きな机が、部屋の中央にあった。ノウアが顔を固くしたのは、黒い布にくるまれた一人のアベドが寝かされていたからだ。左に頭、右へ足を向けて、仰向けになっている。

ノウアは袖口で鼻を覆った。悪寒の波が押し寄せ、胃の中のもの暴れる。冷や汗が吹き出たが、懸命にこらえて遺体を見つめた。女王が抑えた声で言った。

「アバルバン捜査班の一人です。今日、馬に乗せられて運ばれてきました。馬がどこからやって来たのかは不明です。班員たちを捨てるやいなや、山奥へ逃げていったのです」

「彼は、狩りの人か？」

ノウアは、布のほだけた胸元から、遺体は皮の胴着を着ていることに気づい

た。

女王は「ええ。ゲドルという名の者です」と答えた。

ゲドルの肌は色を失って灰色になり、なにを吐き出したのか、口の端に鉛色の筋が残っていた。

ノウアは、全身を見るために布をどかした。すると、片や腕、足にかけて、川のように鉛色の筋が走っていた。まるで、血液が水銀に変えられてしまったかのようだ。

「……他の者も、こんな風に？」

ノウアの問いに、女王は頷いた。

「他の者は安置室に運んであります。ですが、山犬と、師の人シャンタリク、セーテトがまだ戻っていません」

「戻っていない？ 山犬は獣の人の連れのはずだし……、なぜ……」

だが、女王は首を振った。わからない、シスルア光の民はそう言っていた。しかし、彼女の強張った顔と、射るようなまなざしは、別のことも言わんとしていた。

「あなたがなにもおっしゃらないのであれば、わたくしから示させていただきます」

二つの銀の目が、怪しくノウアを捉える。その鋭さと冷たさに、老魔導師はたじろいだ。

女王は長机をまわると、遺体の左手首にまだかかっていた布をどけた。

覗き込んだノウアは、息をのんだ。八本まつげを生やした一つ目の刻印が、こちらを凝視していた。下には実文字が小さく書かれている。その意味が飛び込んできたとき、ノウアは飛びのいた。

「なぜだっ！ この実文字アウンザットウを使う深モッベの術テアは、あたしが生まれる前に捨てられた

はずだ、なぜ使われているっ」

「……ノウア、それはわたくしがお聞きしたいことです」

光シスルアの民の銀の瞳には、裏切られた者による、哀しみの色が浮かんでいた。

「八本まつ毛の目……。これは、魔導師が行った、という証拠ではないのですか？」

恐ろしい部屋を辞したノウアと女王は、向かい合う長椅子にうもれるようにして座った。老魔導師は、腹のあたりがぐるぐる渦を巻いて気持ちが悪かった。冷えた体はなかなか温まらず、頭痛もしはじめている。エサルノウアは召使いを呼び、茶を持ってこさせたが、それでも二人の体は温まらなかった。

「魔導師は、あなたを含め、三人しかおりません。その三人のうち、誰かが深モウベテの術を習得し、捜査班を死においやった、と……」

女王は、そこで息をついた。打ちのめされ、疲労の色が強くにじんんでいる。

「……もしこの一件を公にすれば、誰もがそう思うでしょう」女王は言った。

ノウアは、彼女を見つめた。女王も、紫の目を見つめかえず。

「……ですが、わたくしは……、あなた方のいずれも、これをやったとは思えません」

二人は、互いの目の奥を探った。

「あなた方は、国の重要問題に尽力している。それは本心でやっているのですか？ ……それとも、自らの首を絞めているのですか？ 自作自演なのですか？」

ノウアは、身を乗り出した。

「いいえ、陛下。あたしたちはなにも知らない、と言いたい。証拠がすでに挙がっている以上、言葉は無意味だろうが」

二人は、一つ目の刻印を思い出し、ぞっとした。

「……あなたの弟子、アリアとアルテナは？」

「二人は、やったやらないの問題以前に、できないのです、陛下。あの深の術モッベテアに使われている実文字アウシザットゥは、あたしの幼年時代には捨てられ、今では完全に消され

たもの。……彼女たちは、あの実文字アウシザットゥの存在すら知りません。それに、今の彼

女たちの実力では、あれは作り出せません。あの深の術モッベテアは、緻密ながら美しく

まとまっていた。無駄のない計算式のような。あれは、深の術モッベテアを知り尽くし、術構成感覚が優れた者が作ったものだ」

「そんなことができるのは……」

「そう、このあたししかいないんだよ！」魔導師は突然叫び、皺だらけの顔に不吉な笑みを浮かべた。瞳はぎらぎらと輝き、苦々しい痙攣が口の端を歪ませた。

女王は啞然とした。しかし、すぐに頭を振り、額に手を当てた。

「……あなたじゃないでしょう。それだけはわかっています。もしあなたであれば、現時点でエイネーは完結しています。見事にこの国を奪ったあなたに、わたくしは拍手を送るでしょう」

「それ、他の者の前で絶対に言うんじゃないぞ。あたしの前でも、もう二度と言いな」

エサルノアは、ちらっとノウアを見上げた。

「なぜ？ あなたはわたくしより断然魔力が強い。わたくしを丸め込むことなどたやすい。強者が弱者に代わって統治を行うのは、自然なことです」

睨みつけるノウアの顔から、エサルノアは顔をそむけた。

「ごめんなさい……。言うべきことではありませんでした」

ノウアは、椅子の背にもたれた。

「混乱するのはわかります。あたしだって混乱している。だが、あんたは芯のあるアベドのはずだ。こんな小さな頃から、あたしたちに面と向かってものを言える―それも、真実に近いことを言えるアベドだった」ノウアは、手で膝丈くらいの背を示した。「恐れで国を手放すようなことがあってはいけない」

「事実を述べたまでです」

語気を強めたエサルノアに、ノウアは鼻で笑った。

「特有の自尊心が戻ってきてよかった。だが、あなたは自分の力を侮っている。そこが一番の弱みだ」

光シスルアの民は、しばし床を眺めた。一度東ねて毛先を流した白金の髪は、樹霜のように静かに輝いている。だが、その中で沈黙する若いアベドの顔は、その捕えがたい魅惑的な強さなど、知る由もないようだ。

ノウアは、彼女は幼子のときからそうだった、と思い出した。魔導師と光シスルアの民は立場上早くから関係を築くが、エサルノアを誕生から現在まで相談役兼教育係として側で見えてきたノウアは、彼女が持つ権力依存しない姿勢にいち早く気づいた。それは、光シスルアの民の力そのものを疑っていると見えるときもあり、この性質は先代女王カサレアと正反対だった。カサレアは、権力と魔力により統制を図っていたからだ。

ノウアは、興味深く、目の前の若き光シスルアの民を見つめた。権力にも、魔力にも

依存しない彼女は、いったいどこを歩いてゆくのだろう。

そんな光シスルアの民が、目を上げて背を伸ばすと、どうしてか、とたんにこちらの背ものびるのだった。それが、エサルノアの力なのだろうが、なんというものなのか、いまだにノウアはわからなかった。

「あなたではないと先ほどは言いましたが、かといって、このまま話を流すわけにもいきません。魔導師の印があったことは事実ですから。あなたの処置を考えなければ」

「ああ、あたしも居心地が悪いままだ。どっちかにしようじゃないか。敵とみなすか、そうでないか」

ノウアの言葉に、エサルノアは見極める目つきをして頷いた。

「分かりました。では、〈赤雫の約〉を行いまししょう。もし、あなたが深モウベイアの術を使い、アバルバン谷捜査班の命を奪ったのであれば、光シスルアの民の命令に背き、アベド殺害の罪を犯したとして、あなたには……」

彼女は、言葉を詰まらせた。ノウアは、どう言われるか分かっていたが、じっと待った。

女王は、やがて息を吸った。

「……あなたには死が与えられます。また、仮に無実が証明された場合でも、あなたは生涯、光シスルアの民の監視下におかれます。あなたが今後、深モウベイアの術を使ってアベド殺害を起こした際も、前述の処置が行われます」

「何もしないよりましだ。安心するね」

エサルノアは、顔を歪ませた。

「これは、あなたが死ぬということなのですよ！ もしの場合ですが、わたくしはその、もし、が怖いのです！ 正直に言いますが、こんなことはやりたく

ありません。本来なら、言葉で無実を証明するべきです。魔法に頼るのではなく」

「だが、もうその段階は過ぎている」

エサルノアは、ため息をついて立ち上がった。

「……少し時間をください」

しばらくの間、彼女は部屋の中を行ったり来たりした。ノウアは、じつくり待った。ただ床の模様だけを眺めながら。

やがて、永遠とも、一瞬ともとれる、名前のない時間が過ぎると、女王は振り返った。

「……分かりました。やりましょう」

ノウアは、席を立った。

女王は、書斎机へ向かい、四つの三角錐に支えられた水晶を手にとった。何事か呟き、机上に戻す。水晶の中で、色のない流れが生まれた。

「これからの会話を記録します。この水晶が、わたくしたちの証人です。……」

魔導師ノウア、これから、あなたの言葉と行為が真実かどうかを見極めるため、〈赤雫の約〉を行います」

女王の前に離れて立った魔導師は、慇懃に頷いた。

もし証拠の通りであれば、この有能な魔導師は、〈赤雫の約〉の魔法により、この世から消える。エサルノアは、心の奥底ではノウアを信頼していたが、まだ「もし」の可能性に怯えていた。この老魔導師が消えた後のエイネーを思うのが怖かった。

「では、アバルバン谷への捜査班の班員が、モウベイヤ深の術により命を落としたこと、彼らの腕に魔導師の目が刻まれていたこと。これらが〈赤雫の約〉を行う主な理由です。魔導師ノウア、これを認めますか？」エサルノアは、〈赤雫の約〉の

形式通りに、言葉を紡いだ。

「ええ、異論はありません」ノウアは、頷く。

「では、再び光シスルアの民の信頼を得るため、あなたの〈黄身シラ〉を判断します。影の人が正当な判断を下しますように」

「あたしもそう望みます」

「では、己の持つ刃で、自身の内を引き出し、こちらへ差し出しなさい」

ノウアは、懐から小刀を取り出した。〈月の爪〉と呼ばれる親指ほどの刀は、女王が見守る中、老魔導師の手のひらを切り裂いた。皴だらけの手に赤い線が浮かぶ。女王は小壺を差し出し、赤い雫は一滴、二滴と落ちた。

それから女王は、歌うように〈赤雫の約〉の術を唱えた。柵や机の下に潜んでいた影が伸び、部屋は暗黒に包まれていく。空気ははじけ、熱と光、そして冷たい風が、女王と魔導師の肌を刺し、衣をためかせた。壺を持つ女王の手が激しく震える。とたん、壺から火花が噴き出した。激しい色の光が飛び交い、部屋を駆け巡り、破裂音を伴いながら、岩石となって床に碎け散る。銀砂はノウアの足元で放射状に広がり、暗がりですくすく輝いた。

壺はますます激しく震えた。亀裂が走り、隙間から光がこぼれ出る。とうとう壺は、甲高い音を立てて碎け散った。

ごんつ、と、残った壺の底が床に落ちる。エサルノウアが手を放してしまったのだ。彼女の手からは、血が出ていた。

静寂と、元の明るさを取り戻した室内で、ノウアは目を瞬いた。

「思ったよりも派手だったな。で、結果は……」銀の輪の中から、彼女は問うた。

女王は、赤くなった手を前に静止したまま、震えて言った。

「ノウア、あなたは……あなたの血は、生まれ故郷しか語っていません。星の

洞窟でお生まれになったのでしょうか？ 岩石と銀砂がその証拠です」

部屋を見渡し、光シスルアの民はノウアに目を戻した。

「けれど、それ以外、何も語っていません。あなたは、……あなたは、無実です」

ノウアは、ほっと息をついた。「焼き尽くされるのかと一瞬思ったがね。なにせ、初めてのことだったから」

「血の性格によって、〈赤雫の約〉の様子は異なるのです。あなたは、いま起こったことを内側に秘めているアベドだということですよ」

女王は慎重に言葉を選ぶように話した。指を一振りし、銀砂を宙でまとめる。銀者は小石となり、正八面体の透明な檻に包まれた。

「無実は証明されましたが、今後のことをふまえ、あなたは光シスルアの民の監視下に置かれます。あなたの命は光シスルアの民のものとなり、もし王家に背くことがあれば、ただちにこの石が割れ、死によって罪を償っていただきます」

「その言葉、重く受け止め、精進いたします」ノウアは頭を垂れた。

エサルノア女王は、水晶に布をかぶせると、記録を終わらせた。

「……あなたは、恩師であるのに」

女王は、今まで詰めていた息を、ようやく吐きだした。棚へ向かい、包帯と薬瓶を取り出す。

「だが、魔導師でもありません、エサルノア女王。あたしは別に、あなたのことを生気だとは思ってないよ。するべきことをしたまでだ。形式上ってやつさ」

ノウアは、努めて軽く言い、治療を手伝おうとした。

「平気です。自分でできますよ」

エサルノアは力なく微笑む。しかし、ノウアは聞かず、さっさと傷口を消毒

し、薬を塗り、包帯を巻いた。

「アバルバン谷へ行かなければなりません、今すぐに。あそこに元凶が隠されているのは、たしかなのですから」エサルノアはおとなしく、包帯を巻かれる手を見つめた。

「だが、少し待ってくれないかね？　あの深の術の仕組みを解明する時間がほしい」モウベイヤ

エサルノアは、ぎよつとして眉をひそめた。

「どのように？　失われた文字で書かれた術でしょう。それに、深の術自体も、目覚めの戦い後に封印されたではありませんか。今は誰も、その知識を持ち合わせていませんよ」モウベイヤ

「秘庭書庫があるだろう」アーナラミ

ノウアは、出血している自分の手も調べ、軽く包帯を巻いた。エサルノア女王は、目を見開いた。

「あそこは腐り果てた場所です。時間がすべてをだめにしたと、カサレアが言っていました。保管された書が悪質な力を放ち、埃が、正しい姿を失わせ、道理を外れたいくつもの魔法記録が、アベドを怖気づかせ、圧すると。それを外へ出さないよう、わたくしが生まれる前に、あなたを含む魔導師たちとカサレアは、取り決めになさったはずでは？」

「だが、すべての鍵はあそこにある。狩りの男が鉛色の液を吐いて死んだこと、〈見えない死〉、それらの原因が掴めるかもしれないじゃないか。秘庭書庫にアーナラミはあたしも行ったことはないが、調べる価値はあるだろうよ？」

「安全ですか？」

女王は訊ねた。実のところ、エサルノアは、幼い時に、ひそかにカサレアか

ら聞かされていたことがあった。

「秘庭書庫は、世界と深の術とを離すためにあるのです。出入りをする部屋ではない。もし頼まれても、魔導師だけは絶対に立ち入ることのないようになさ。い。どれほど国を思う善き魔導師であっても、深の術に触れば理性を失い、やがて国だけでなく、世界を混沌に貶める」

これを言ったときのカサレアは、ひどく厳格な顔をして、エサルノアを見つめていた。エサルノアは、当時抱いた、魔導師たちの手綱を持っているのは自分であるという感覚を思い出した。

「国の目であるあなたが、正しきことを見極められなくなり、力を暴徒化させれば、エイネーは〈見えぬ死〉を解決させるどころか、崩壊してしまいます。目覚めの戦いは、そうして起こったはず。それと同じ過ちが二度と起こらないよう、深の術は秘庭書庫へ葬り去られたものではありませんか。……ノウア、確かにわたくしも、あそこが閉じられたまま時が流れるのは問題だと思っていたんです。ですが、魔導師の数が少ない今、あなたを失えば残酷な結果になるのが目に見えている」

ノウアは唸った。

「けれど、もう一度アバルバン谷捜査班を送り出しても、無残な姿で帰ってくる可能性が高いでしょう。……なあ、エサルノア、あの刻印は、向こうからの挑発と捉えられるのではないかね。あそこには、気味の悪いことに、有魔力者がいる。そう、あたしたち以外に、あたしたち以外にだよ！」

ノウアの叫びは、現実となつてのしかかった。

「……しかもそいつは、深の術という、古臭い、外道な魔法を使うのだ。アベドの遺体でもって、向こうは示してきた。これは、挑発以外のなんでもない。

「そうでしょう？」

「では、具体的にどうするつもりで？」女王は、ぎらぎらと燃え盛る銀の瞳で魔導師を見据えた。

「秘庭書庫で、アーナラミ深の術とモウベイア〈見えない死〉の関係を突き止める。鉛色の液、不快感、源力の吸い取り、これらは二つの共通点だ。術の仕組みが分かれば、精製炎より有効な解呪方法が作れる。アバルバン谷へ行く前に、向こうの手口を知っておくべきではないかと」

エサルノアは、魔導師から目をそらした。瞬間、ノウアは気づいた。

「カサレアから、何か言われてるんだろ」

エサルノアは、それには答えず、こう言った。

「この判断は、長の会でいたします。魔導師を秘庭書庫アーナラミへ向かわせるか否か。これは、あまりにも危険な賭けです。あなたがなにをおっしゃろうが、この問題に関しては、あなたの言葉はなんの意味も持てないのです。あなたは、どうあがいても魔導師なのですから」

彼女はきびきびと答えた。その顔に、カサレアの厳しい影が浮かんでいるのを、ノウアは見つけた。

「……そうだね、陛下。仰せのままに」

ノウアは、そう言うことしかできなかった。

「今週末に緑の月の長の会がありますが、緊急招集をかけます。あなたは城に留まっていてください。長たちの了承を得るまで、あなたが島を歩き回ることを禁じなくては。……これは、長たちの反感を和らげるためです。分かってください」

ノウアは、静かに頷いた。魔導師は、胸の内では分かっていた。女王も本当

は心から信じたいのだ、と。だが、もう元の透明な関係は失われてしまった。(赤
雫の約)で無実が証明されても、かつての強固なつながりは復元できない。

魔導師は背を向け、女王の部屋を出ていった。



部屋を出ると、小さな影が、階段へ逃げていくのが見えた。ノウアは、聞き
耳をたてられたことに気がついた。

「誰だね？ 逃げても意味ないよ、ばれちまってるんだから！」

すると、階段の影から、白金色の髪をした少女が顔を出した。手足の長い熊
のぬいぐるみを持っている。まあるい頬をもつ彼女は、すまなそうにノウアを
見上げた。その目は、女王と同じ、銀色をしていた。

「サルネア王女つ……。一体ここで何してるんだいっ！」ノウアは小さく怒鳴
った。

サルネア王女は、しかし、心配そうに首を傾げた。

「あの、お声が聞こえたんです、ノウア様。エサルノアのこと、大丈夫かなっ
て、思いました……」

「女王は平気だよ、サルネア様。さ、自分の部屋にお戻りに……」

「でも、朝はひどい騒ぎでした！ 捜査班のアベドが、亡くなったって……」

ノウアは、幼い王女の背中を押し、ともに階段を下りた。

「ええ。でも、それは、直接聞いたらいいのでは？ 聞き耳はどんな場合でも

よくない」

「でも、聞いても、誰も本当のことを話してくれないじゃない！」

ノウアは、幼い頃のエサルノアと話している気分になり、やれやれ光シスルアの民は……と思った。彼女も幼い時、こうやって大人の事情に首を突っ込こんでいた。

「……あたしは、本当のことを話しますよ。サルネア様」ノウアは言った。

「え、ほんとうに！」

「ああ。でも、今は外の空気が吸いたいんでね。庭へ行こうじゃないか？」

「いいわ！」

二人は、一階まで降り、廊下を突き進んでいった。城の中は、やはりアベドの気配がなく、しんと静かだった。

「……ノウア様だけだわ。『ちゃんと話す』って言ってくれるのは。みんな、なんでもサルネアに隠して、ごまかすの」

「あたしも、隠し事は嫌いですね。みんな『守ろうとしているんだ』というけれど、まったく迷惑でしかないね」

「そう！ だから、聞き耳をたてちゃうのよ」

サルネア王女は、せかせかと、ノウアの隣をくつつくようにして歩いた。

やがて二人は、中庭へ出た。日が伸びてきているのか、まだ太陽は完全には沈んでおらず、蜜色の穏やかな世界が広がっていた。

「綺麗だね……。主の祭りがもうすぐだ」

ノウアが目を細めながら言うと、サルネア王女は、「あ！」っと叫んだ。

「そうだわ、ノウア様。あのね、この光の色で思い出したけれど、昨夜、影の人が夢にでてきたんです！ そういうの、影夢かげゆめっていうんですよね？」

ノウアは、どきつとした。

「そうだよ。影の人があたしたちに伝えたいことがあったら、魔力を持つ者の

夢に現れ、言葉を伝える。……で、どんな影夢だったのかね」

ノウアは、ここ数年影夢を見ていなかったたので、身を硬くした。ノウアだけでなく、エサルノアやアリア、アルテナまでも見ていないのだ。それなのに、一番幼いサルネアが影夢を見るとは。なにか意味があるのだろうか。

サルネアは、しかし、曇った顔で首を振った。

「あんまりお話しするほど、長くはなかったわ。それに、影の人たちの言っていることも聞き取れなくて……。……あの、ノウア様」

彼女は、誰もいないか周りを確認し、ノウアに屈むよう手招きした。王女は小声で言った。

「これは、あたしのせいじゃないですよね？　あたしは、ちゃんとした光シスルアの民ですよね」

「影夢が中途半端だったから、心配してるのかい？」

「サルネア王女は、こくりこくりと頷いた。

「平気だよ。あなたは王座を継ぐ立派なアベドだ。銀の瞳がその印ですよ。それに、影夢はあたしも他の魔導師も見っていない。影の人は、もしかしたら、サルネア様だけに何か伝えようとしたのではありませんか」

「ほんとうに！　……そうなのかなあ？」

王女は、照れと不安の混ざった奇妙な顔をして、体をねじった。

「何も覚えていないのかい？」

「いいえ、覚えているわ。あのね、ちょうどいまみたいに、中庭にいたんです。夕暮れで、あたしは一人で歩いていて……」

サルネア王女は数歩進み、前方を指さした。

「そこで、木の影に誰かがいることに気づきました。手招きされたので、あたしは走っていきました。すごく急いでいる感じだったから。けど、途中で……」

隣に立ったノウアに対して、サルネア王女は、肘をくつと突き出した。

「誰かがこうやって、邪魔してきました。あたし、倒れて……。夢はそれで終わりです」

ノウアは顎を搔いた。「や、本当に短いね」

「でも、あれは影の人だと思うのよ、絶対！ 嘘じゃないですよ！」

「サルネア様、必死にならなくとも大丈夫ですよ。たとえ短くても、あなたは影夢を見たんだ。かといって、それであまり得意げになるのも領けませんかね。ここは、冷静に考えることが大事です」

「じゃあ、ノウア様は信じてくださるのね、あたしが影夢を見たことを！」

「ええ、もちろん。そしてここから必要なのは、その意味を考えることです。影の人は伝え損ねたのか……。まあ、そんなことはめったにないから、伝えなかったことこそ伝えたかったことなのか……。そこを上手く考えないとね」

「うんうん。あのね、あたし、それをエサルノアに伝えたいの」サルネア王女は、興奮で鼻を鳴らした。

「影夢は重要なことです。見たらすぐに有魔力者に伝えるんだ。そして、できたら自分の考えも持っておくんだよ。ただ言うだけは、誰でもできるからね」

「うん。ノウア様」

二人は、庭の中央にある長椅子に座った。約束通り、ノウアは、先ほど女王の部屋であったことを、静かに語って聞かせた。サルネア王女は、黙ってその話を聞いた。

「これから少し、忙しくなるかもしれませんが。長の会のことじゃない。もっと先のこと。……。あなたの夢も、少し関係あるのかもしれないねえ。時期が時期だから……」

「ノウア様は、どう考えているの？」

魔導師は、椅子の背にもたれて、息を吐いた。

「すごく辛いことが、いくつも起きるだろうってことだね。だが、これは考え
じやなくて、勘だね。すでに、今日は悍ましいものを見てしまったから。これ
からのことには、よりいっそう、心構えをしていかないといけないよ。今はま
だ、それしかできない」

魔導師の目は、遠くを見つめた。わずかに苦痛が浮かんでいる。

サルネアは目をそらし、皺だらけの魔導師の手を見つめた。節は浮き出て、
いかめしく、それぞれの指にはまっている豪華な指輪が、獣の歯のようにぎら
ぎら輝いている。中でも、蜂蜜色の宝玉をもつ指輪が、一番力強かった。台座
のフクロウは胸の宝玉を太陽のように燃え上がらせ、まあるい両目でサルネア
を凝視していた。

サルネアは、顔を指輪に近づけた。

「すごくきれいだよ。これは使い魔でしょ？ 敵に回したら大変そうね」

ノウアは、目を丸くし、大口を開けて笑い出した。竜のような豪快な笑いは、
しばらくつづいた。

「そう、誰もあたしを倒せませんよ。たとえ百年かかってもね」

「……ねえ、ノウア様。あたし、ずっと、ノウア様の味方ですからね」サルネ
アは真剣に頷いた。

「ありがとう、サルネア様」

サルネアの手を握った魔導師の手は、温かく、岩のように屈強だった。



緑の月の長の会は、これまでにないほど激しい議論が行われた。

はじめに、長の過半数が、「赤雫の約」をもつてしても魔導師が無実だということを受け入れられなかった。特に、商の長のバーデウは半狂乱になって、「魔導師殿は女王様の〈黄身〉にまで入り込み、魔法で都合のいいように操ったのだ！」と喚いた。

それを聞いたエサルノア女王は立ち上がり、銀色の目をぎらつかせた。

「わたくしが〈黄身〉まで侵され、平常でないと言うものは、他にいますか」
誰もが押し黙って、目を伏せた。バーデウ長は、静かに席についた。

女王は、長たちを見渡した。

「わたくしたちがこの場にいるのは、仲たがいするためでも、互いの足を引っ張るためでもありません。魔導師は〈赤雫の約〉により、制限も受けました。

あとは影の人が魔導師と我々を導くことでしょう。それでも、光シスルアの民も魔導師も信じきれぬというのであれば、即刻、退室してください」

商の長の発言は、暗に、エサルノア女王がノウアよりも劣っていると云っているように聞こえた。バーデウ長は、それに気づき、たつぷり膨らんだほほ肉を震わせた。

「失言をお許してください、陛下。私は、陛下と我が国を想って言ったままで」

エサルノア女王は、つと顎を上げたまま、「信頼には信頼で返すつもりです。その他は相応のものをお返しします」と答えた。

「……女王陛下、お一ついいですか」

手を挙げたのは、とがった顎髭を持つ、薬の長ヤーセイだった。

「この事件に魔導師のお三方が関わっていらっしやらないとしたら、一体誰が

このようなことを行っただけでしょう？
深の術モッペイアの使用となると、犯人は絞られるどころか、もはやいないに等しいはずぞ」

「よほど高知能な魔法動物か、もしくは、アスハリエイク国の有魔力者である星狩る者の仕業とかも……」
つくりの長ダムが、大きな手で静かに円卓を叩く。

「他国が関わっているとすれば一大事です。もし我が国の侵略が目的であれば、戦争になります」
狩の長ナデルが鋭く女王に言った。

「ナデル長、確実な証拠が挙がっていない以上、アスハリエイク国を敵とみなすことはできません。また、この件については、いっさい口外しないように。外交に支障をきたします」

女王は、商の長バーデウに目を向けた。

「アスハリエイク国との交易は続けます。現時点では、あの西の国に問題はないと見ます」

「ヤママイ国もですか？ あれの北の岩だらけの国には、石読みと呼ばれる魔法使いがいます」
少々不服そうに、バーデウ長は口をすぼめた。

「ええ、ヤママイ国もです。どちらの国とも、交易は今まで通り続けます。しかし、渡航者には目を光らせておくこと。魔法使いでなくともです」

「承知いたしました」

バーデウ長は楽しそうに笑みを浮かべた。

「では、またアバルバン谷へ捜査班を送るのですか？」
獣のシユグレーデン長が、相棒のナクーに手を添えて言った。
いつもなら背後に控えている相棒は、今日は片時も主人のそばを離れなかった。

「それは却下だ。もう二度と、あんな場所へは行かせない」
今まで黙っていたノウアがはっきりと反対した。

「他に打開案がおりですか？ このまま野放しにしていれば、いずれ見知らぬ有魔力者にエイネーは滅ぼされかねませんが」師の長オルサンが、女王に問うた。

「ええ。^{アーナラミ} 秘庭書庫の開放を検討します」

再び長たちの間で、反対の声が上がった。

「あそこは毒された書物が眠るところですよ。事態は余計悪化いたします！」
つくりの長ダームは、円卓に身を乗り出した。

「あそこに何かがあるというのか？」

ヤーセイ長が顔をしかめ、髭をねじった。「それなら、アバルバン谷へもう一度捜査班を行かせた方がいい。今度は班員を増やして……」

「魔導師殿も行くべきだ！」バーデウ長が提案した。

「ああ、それがいい」ヤーセイ長も頷く。

「……いや、待ってくれ。私は陛下の案に賛成です」

師の長オルサンが言い、みんなはぎよつとした。

「何を言う、あんた本気か！」バーデウ長は顔を真っ赤にして唾を飛ばした。「何があるか、何が起こるか、誰も分かんのだぞ！」

「アバルバン谷から遠いから、そのようなことを言えるのです」

自然のクレアナダ長が、きつ、とオルサン長を睨んだ。

「自然の村は、もう一度、アバルバン谷捜査班を組むことを要求します。もう〈見えない死〉の脅威に振り回されていくありません！ 我が班員らは、案内人として赴き、命を落としました。しかし、彼らは、事実を知るために向かったのです。自然の人の中には、彼らと同じように、自ら解決策を打ち出そうと、捜査に動き出す者もいます。私たちはもう、待つてはいられないのです」

「落ち着きなさい、クレアナダ長。みなも」

オルサン長は腕を広げ、なだめた。

「では、お聞きしますが、アバルバン谷から帰ってきたのは、グロナーシユの肩を射抜いた弓手でありましたでしょうか？ 鉛の液を吹き込む魔法動物でありましたか？」

長たちは押し黙った。

「帰ってきたのは、虚しくも、悍ましい、仲間の遺体です。あれがどういうことか、みんなさんもお分かりのはず。もうあそこは、危険な領域なのです、だが、そうと分かっているながら、もう一度アベドを送り込むことなど、私にはできません。もう十分、犠牲は払ったはずだ。私たちは、彼らの死から何か学ぶことがあるではありませんか？ ……彼らの死を、無駄にしてはいけません。思います」

オルサン長は、長たちを見渡した。

「だから、私は、アーナラム、秘庭書庫を開け、モウベイア、深の術の解明をするべきだと思うのです。また、あれの詳細が分かれば、同様の症状を見せている〈見えぬ死〉も、解決に至るのではないのでしょうか」

「ノウアも同じようなことをおっしゃいました」女王は魔導師に顔を向けた。

オルサン長は、頷いた。

「ええ。ですが、モウベイア、深の術の解明は、我ら、師の人のみでやった方がよいかと。魔導師殿は力を持つ者。女王様の監視下におられるとはいえ、モウベイア、深の術にお触れになるのは、いささか問題があるように思います」

「師の人がやるのなら、アーナラム、秘庭書庫開放については、私は何も言わんよ」バーデウ長は、片手をひらひら振った。「魔導師殿の関与は危険だと思えますね」

「しかし、魔導師様抜きで、深の術^{モッベイヤ}解明は進むでしょうか？」
獣の長シユグレーデンの太い声が響いた。

「師の人の魔法学専門者を侮っているわけではありません。しかし、実際、一番の専門は魔導師殿でいらっしやいます。危険とは言いますが、それは、目覚めの戦い以前の魔導師のことを思っ言っているのでしょうか？ 私は、ノウア殿は違うと思います。すべての魔導師が深の術^{モッベイヤ}の道に進むとは限らない」

「私は、正直言っ、ノウア殿を信用していたこの会議室に入る前とは、まったく違う感情になっています」

狩のナデイル長は、長い指を顔の前で組んで言っ。彼女は、切りそろえた前髪の向こうから、魔導師を見つめた。

「第一に、優秀な狩りの人が二名、命を落としたこと。第二に、彼らの腕に魔導師の紋章が刻まれていたこと。いくら無実が証明されていようと、形と常識が、私に憤りをもたらします。ですが、もう一度アバルバン谷へ捜査班を送ることは、私も避けたい。ですから、私は、ノウア殿を信用することはできませんが、秘庭^{アーナラミ}書庫を開けることには賛成です。……また、ノウア殿にも深の術^{モッベイヤ}解明に携わってもらおうべきだと思います」

バーデウ長とヤーセイ長は、口々にうめき声をあげた。

「危険にもほどがある。私は絶対に賛成せんぞ！」

「ノウア殿のことは、わしもよく知っている。だが、それとこれとは話が別じやろうてっ。問題は、彼女が魔導師だということなのだ！」ヤーセイ長は魔導師に顎を向けた。彼の怒鳴り声は、しばらく沈黙をもたらした。

「……あたしは別に、信用してもらおうとか考えてない」

話しはじめたノウアに、長らの目は集中した。

「あたしはすでに命を女王に預けている。だからここに居るのは、ただの駒だ。その使い方を、あなたたちは決めたらいいんじゃないか？ 少なくともあたしは、制限を受けるといふ罰を受けている」

部屋の空気が変わった。長たちは、身じろぎをした。

「……では、アーナラミ秘庭書庫開放、及び、魔導師介入の件について、他に何か述べる者はおりますか」女王は、改めて円卓を見渡した。

ヤーセイ長が手を挙げた。

「アーナラミ秘庭書庫を開けることに、わしは異論ありません。ですが、魔導師殿は、やはり、介入するべきではないと思います。もし、ノウア殿が深の術にモウベイア手を染めた場合、〈赤雫の約〉によつて直ちに裁かれる、そうですね？」

ヤーセイ長は続けた。「その場合、その後の魔導師の仕事は、すべてアリア殿が負うということになります。それもよろしいのでしょうか」

これにはノウアが答えた。

「アリアには、最低限の実力が備わっている。仮にあたしがどうにかなつても、対処する力はアリアに充分あるとみる。あたしも、深の術と距離を置いて対峙する心づもりだ。だがこの件については、あたしは、これ以上何も言えない。アーナラミ秘庭書庫開放は提案するが、魔導師を入れるかどうかは、あたしに決定権はないだろう」

「しかし、アリア殿はまだお若い。以前の長の会で代理を務めていらつしやつたが、確かに的確な発言はされていたものの、やはり、経験は十分とは言えません。それに、アルテナ殿のご指導はどうするのですか？ いまだ徹底された環境にない上、これ以上隙を増やしたら、今後のエイネーが危ぶまれますぞ」

ヤーセイ長は、苦しうに言葉を吐きだした。

師の長オルサンが、咳払いして手を挙げた。

「論点がずれてきているようですが、すなわち、今は、アーナラミ秘庭書庫を開けるか否か、それに魔導師殿が参加するかどうか、です。魔導師殿がいなくとも、非常に秀でた魔法学専門の者が師の人の中にいるので……」

「私は、それでは不十分だと言いたいのです」

狩の長ナデイルが鋭く言った。

「魔導師様は罰をお受けになった。誠実さは証明された。ならば深の術解明に携わってもらったほうがよいでしょう。事が起きれば起きたこと。先々のことにとらわれて、今をないがしろにするのはどうかと」

「だが、先々を考えてこそその現在の判断ですぞ！ 事が起こってからでは遅いのじゃ！」ヤーセイ長は拳を叩きつけた。

それからしばらく、議論は行ったり来たりした。魔導師をアーナラミ秘庭書庫に入れるか否か、ノウアを失った場合、エイネーはどうなるのか、それらが主な問題だった。

やがて、長い長い鬭論が少し休息を見せると、エサルノア女王は、現時点での仮採決を行った。

「このままでは語り合って終わりです。この問題は結局、やるかやらぬかの二択なのです」

疲れ、激しい感情がくすぶり、疑心の渦巻く長たちの一人一人の顔を、女王は見つめた。

「ではまず、アーナラミ秘庭書庫開放について。採決は、提案者の魔導師を抜いて行います。……賛成の者は挙手を」

師の長オルサン、狩りの長ナデイル、つくりの長ダーム、獣の長シユグレーデンがすぐに手を挙げ、守りの長キシュトーがそれを見計らって続いた。女王自身も挙手をした（女王の票の重さは、長の会では長たちと同等だった。これは、エサルノアが女王の座についた際につくられた新たな制度だった）。そして自然の長クレアナダが、期待と不安のこもった面持ちで賛同し、薬の長ヤーセイと商の長バーデウは、渋々といった様子で、最後に手を挙げた。

全員一致で、秘庭書庫開放は仮可決となった。

「では次に、深の術解明モッベイヤについて、魔導師を参加させるか否か。賛成の者は挙手」

これには、師の長、薬の長、商の長、守りの長が手を挙げなかった。しかし、残りの四つの長と女王は賛成を示したため、一票差でこの議題は仮可決された。師のオルサン長が、手を置いて立ち上がった。

「この件は熟考する必要があります。正直申し上げて、解明は師の人だけでも十分なのです。魔導師殿は、術の組み立てや発動の際にお力が必要であるわけですので……」

「オルサン長、あなたの言う通り、これは慎重な判断が必要です。ですが、わたくしといたしましては、一つの仕事人に任せることもまた、危惧していることなのです」

女王エサルノアの言葉に、オルサン長は言葉を詰まらせた。

夕食をはさみ、長の会は再び開かれた。最終採決のために、彼らは一度頭を冷やしてから臨む必要があったのだ。

結果として、秘庭書庫開放は全員一致の可決、深の術解明への魔導師加入は、アーナラミ六対三で、わずかな変動あつての可決となつた。これは、守りの長キシウトーの意見変更によるものだった。

「もちろん、ええ、子どもたちには安全な世界が必要ですからね……ええ、ノウア様ご参加なさることには、不安もありますが……アリア様のこともありますし、でも、大変なのは、これからも、今も、変わらないわけでして……ええ、そこにわずかに望みがあるなら、やるべきではないかと、賛成に、いたしました……。一つ、危険ではありますが……。……もちろん、監視として〈警備の者〉が必要な場合には、協力いたしますよ、はい、ええ……」キシウトー長は曇り硝子のような薄い目を行ったり来たりさせながら言った。

オルサン長は、ぐっと奥歯を噛んでわずかにエラを盛り上がらせながら、キシウトー長を見つめた。

エサルノア女王は、言った。

「これは賭けです。誰もが不安を抱えている。しかし、わたくしたちは、魔導師ではなく、ノウアというアベドを信頼し、委ねます」

彼女は、その月の目を恩師に向けた。そこに切実な願いを見たノウアは、立ち上がり、長らの顔を見渡した。

「お気持ちに感謝する。全力を尽くして、応えさせていただく」

これが生涯最後の大舞台になるだろう、ノウアは、そう、腹をくくるのだった。



二日後。ノウアは、城の地下階段を降りていた。手には、先端に文字の彫られた鍵が握られている。後ろから、師の長オルサンの、重く規則的な足音が続いた。

「……いずれ、後悔することが、ないといいですな」オルサン長が沈黙を破って言った。

「後悔？ なぜ後悔するんだい？」ノウアは石灯いしひを掲げ、先を確認する。

オルサン長は言った。

「目覚めの戦いは、魔導師たちの過信によって起きました。かつて深モウベイヤの術は、魔法改良によって生態系を操作できる画期的なものとして重宝されましたが、その乱用により、エイネーの自然形態は一度、滅びかけたのです。にも関わらず、生命の御者になった当時の魔導師たちは、高慢の道を突き進み、反乱を起こした。言い換えれば、深モウベイヤの術はそれほど魅力的な魔法なわけですが、もう一度魔導師の顔に泥を塗ることがないよう、気をつけていただきたいということです。誰でも理性を失うものが、ここから先には、あるのですから」

「それを知りながら開けることが、後悔することになると？ あのね、もう決意を固めて行かなきゃいけないんだ。後悔なんて遅いんだよ」

老魔導師はクスクス笑った。オルサン長は顔をしかめた。

ようやく、最下にある秘庭アーナラム書庫の鉄扉にたどりついた。埃と黴の匂いが胸を刺す。

ノウアは鍵を差し込んだが、瞬間、頭頂部を掴まれるような感覚がした。複数の羽ばたきが聞こえる。

顔を上げた魔導師は、舌打ちした。暗がりには、ぼんやりとした姿が暴れまわ

っている。

「ノウア殿？」

オルサン長には、音も姿も捉えられなかった。

《アデシヤ（可視）！》

ノウアは叫び、オルサン長を壁へ押した。途端、口だけの蝙蝠のような生き物が、師の長の頭すれすれを飛んでいった。

オルサン長は度肝を抜いて、二、三步下がった。「ナウワバミーグ囃し立て鬼グだ！」

「下がってる。追い払うから！」

ノウアは石灯を師の長に預けた。《ナウワバミーグ囃し立て鬼グ》は、じやがいもみたいな頭に、干からびた小さな体、皮膜のある翼をもつ魔法動物だった。目や鼻はなく、太い杭を打ち込まれて開けられたような、大きな口だけがある。

長い喉を低く響かせ、《ナウワバミーグ囃し立て鬼グ》たちはエイネー語で歌いはじめた。

ホーホー ヤーホー 秘密の門

ここには 誰も 来ちゃいけない

ホーホー ヤーホー 魔導師さん

あんたの企み 教えてちょ

ぼくらが手助けしてあげる

ホーホー ヤーホー 悪だくみ

鳥に手首 魚に足首

ペニヤッツに鼻を ナクーに翼を

何でもかんでもくつつける！

あんたは魔導師 何でもやれるね

空に穴あけ お手のもの！

ノウアは、モウベイア深の術による魔法改良が歌詞になっていることに気づいた。魔導師を囃し立てるにはそれが一番いいとも思ったのだろうか。

「今の流行りは、〈見えない死〉なんだけどねえ！」ノウアは叫んだ。

「そんなことを言っている場合ですか。早くあいつらを殺しなさい！」オルサン長は石灯を振り回した。「気持ちが悪いっ！」

「あいつらは、別にアベドを……」

「殺せ！」

ホーホー ヤーホー 魔導師さん

いったい何を言ってるの

ホーホー ヤーホー よく分からん

お馬鹿はどっちだ？

無知はどっちだ？

「殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！ 殺せ！」

オルサンの怒号に、ノウアはたまらず激昂した。

「黙れー！」

老魔導師は手を突き上げると、アウシエヌン実言葉で地下いっばいに強烈な光をほとばしらせた。ノウワバミーグ「囃し立て鬼」は、身を焦がし、耳障りな叫び声を上げた。彼らは、翼を折りたたんで、〈内世界〉へと逃げた。

最後の一匹の姿がぼんやりと消えていなくなると、ノウアは息をついて、鉄扉に向かい合った。

「……魔法動物と会話するなど、甚だしいにもほどがあります。危うく命を落とすところでしたぞ！」オルサン長は、口ひげについた唾をぬぐって言った。

「ナツワバミীগ《囃し立て鬼》はアベドを食わないよ。それに、他に問題はなかっただろ」

ノウアは、鍵を差し込み直した。埃だか錆びだかがあるのか、ひねってもすんなり開かない。

「あれが、あなた様のいつもの姿勢なのですか？」

「何が」

オルサン長は身をわななかせた。

「あやつらと会話して時間を食うことですよ！ これを見たら先代たちは泣くでしょうな。もつと手短に……」

「あたしは先代たちに泣いていた。あんた、殺すという言葉の意味を、どれほど理解しているのかっ」

鍵が開いた。ノウアは、両手で力任せに扉を押した。鍵と違って、扉は渋ることなく開いた。

中はどす黒く、何も見えなかった。重い黴の匂いと、暗闇の圧が降りかかってくる。

ノウアは、息を吸った。オルサン長は半歩下がったが、気を持ち直して言った。

「……まずは、照明設備が整っているかですな」

ノウアは、石灯をオルサン長から受け取り、投げるようにして先へ飛ばした。明かりに照らされて、かびた紙束が、ぎっしりと本棚に詰まっているのが見えた。萎れ、黒ずみ、長い間日の光を見ていない、死んだ書たち。しかし、闇はどこまでも続き、石灯の淡い光は、いまにも消えそうな儂い点となってしまう。

ノウアは、挑むように中へ入った。

オルサン長は、頭上をぐるっと見渡した。そして、口をしっかりと結ぶと、師

の人の白い外衣は、まもなく秘庭書庫アーナラミへ消えた。